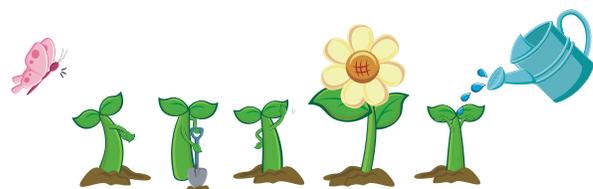


平成 27年度 多文化共生セミナー



外国につながる子どもたちの心の声 ～伝えたいけど、伝えられない思い～

講演報告書

日時：平成 27 年 8 月 4 日(火) 14 時～16 時
場所：つづきMYプラザ多目的室1・2

主催：つづきMYプラザ
(都筑多文化・青少年交流プラザ)
後援：横浜市教育委員会

*講演の内容をシンポジウム当日の録音を基に作成いたしました。配布資料については、誌面の都合上、一部割愛しております。

■はじめに

(つづきMYプラザ館長 林田育美)



皆様こんにちは。暑い中お集まりいただきましてありがとうございます。都筑多文化・青少年交流プラザ館長の林田です。どうぞよろしくお願いいたします。

毎年夏に、多文化共生セミナーを開催しております、今年で4回目になります。この施設は名前の通り、国際交流や外国人支援と中高校生世代の居場所事業という異なる2つの分野を併せ持つ非常に特徴的な施設です。この多文化共生セミナーでは、2つが重なる部分という意味で、毎回外国につながる子どもたちにかかわるテーマを設定しております。

今年のテーマは「外国につながる子どもたちの心の声～伝えたいけど、伝えられない思い～」といたしました。外国につながる子どもたちの心の中には、言語の壁や人間関係構築の壁があるように感じます。そういう時に私たち大人はどうやってそれを見つけ出し、どうやって寄り添えばいいのか。そういう観点で、これからの2時間、皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。最後までどうぞよろしくお願いいたします。

【司会】

本日は臨床心理学博士の中本テリー先生をお迎えしております。最初に中本先生にお話をいただきまして、その後、横浜市立鶴見中学校国際教室の土屋先生、ブラジル国籍で、現在桜美林大学1年生の根本ケイコさんのお話をお聞きしたいと思います。その後ブレイクとさせていただきますが、その際に、質問シートにお書きいただく予定です。よろしくお願いいたします。

では早速「外国につながる子どもたちの心の声～伝えたいけど、伝えられない思い～」と題としまして、中本先生にご講演をお願いいたします。中本先生は、ご存知の方も多いと思いますが、臨床心理士博士で、よこはまチャイルドラインスーパーバイザーとしてもご活躍でいらっしゃいます。それではよろしくお願いいたします。

■第一部 講演

『外国につながる子どもたちの心の声～伝えたいけど、伝えられない思い～』

中本 テリーさん

臨床心理学博士、よこはまチャイルドライン スーパーバイザー

よろしく申し上げます。この中に聴覚に少し問題があってマイクを通すと聞きにくいという方いらっしゃいますか？私の肉声はとても大きいですよ。大丈夫ですか、皆さん。じゃあマイクを通していただきます。より美しい声になります。

はじめまして。今日は「外国につながる子どもたちの心の声」というタイトルでお話をさせていただきます。私は子どもではないので、子どもの声っていうのはわからないけれども、大人が子どもにどういう風に接したら良いのかというのをいろいろとお話していただいているので、今日はそういうのを少し共有させてもらえたらと思います。

先日、ドラマで「Dr. 倫太郎」っていうのがありましたよね。あれはね倫太郎さんは精神科医で、私は心理学者。何が違うか知っていますか、皆さん。精神科医はお薬を出してくださる先生で、心理学者はおもにお話を聴くのが役割です。で、我々に話をすると「分析されちゃうのかな。」とか、ちょっと怖い印象もあるので、アメリカなんかだったらドクターバーブとかドクターマイクとかドクターテリーとか、ちょっとフレンドリーな話し方をしますので、ドクターテリーのプロフィール、まずはどんな人間が話しているのかっていうことを紹介させていただきます。

心理学博士、日本だと臨床心理士という資格を持っています。大学院で心理学を教えています。今日、学生さんや卒業生も何人か来ていただいている、ありが

たいなと思っています。で、あちこちでカウンセリング、心理面接をやっています。東日本大震災があってから4年程ですね。毎月東北の方に伺っていて、研修をおもにやらせていただいている、それが何かといたら、子どもたちって大変なことがあった時に反応示しますよね。その反応は当たり前の反応で、私たちが子どもにカウンセリングする頻度が求められます。週1回でも少ないぐらいで、すごくコンスタントにやらないといけないけれど、関東から東北に通いながらそれをするのはすごく難しいので、一番そばにいる大人、親だったり、学校の先生だったり、親子支援をされる方だったり、教育委員会さんだったり、そういう所の大人の方に対しての研修をやらせていただいています。

若者就労支援というのは、大学卒業して就労したんだけど人間関係につまずいてしまって、そのまま引きこもりが始まったり、あとは極端な場合、小学校一年生から学校に行けなくなってしまって、それで社会と繋がりが持てない方の就労支援をしています。

あとはがん患者と家族のサポートをライフワークとしているので、こちらでは鎌倉乳がんセンターというのが鎌倉にあるんですが、そちらと静岡県立がんセ



中本 テリーさん

ンターという所で、おもにがんの患者さん達のサポートを仕事としています。

それで私はサンディエゴ、カリフォルニアに長く住んでおりました。サンディエゴに行ったことがある人？あ、いた！はい、お一人でしたね。今は直行便がありますので、是非行ってください。JAL のテコ入れにいらした方ってどなたかご存知ですか？知らない？稲盛さんです。稲盛さんのお宅が、サンディエゴにあるんですよ。今、JAL 直行便が飛んでいますので、今のうちに是非行っていらしたらいいかなと思います。

サンディエゴ、聞いたことないですか？（映像を見ながら）今ピコピコしているところがサンフランシスコで、メキシコとの国境にあるところがサンディエゴになります。サンディエゴってどこかの市の姉妹都市なんですけど、ご存知ですか？まさか、まさか、どこでしょう？横浜ですよ！横浜の姉妹都市です。とてもきれいな海がある所です。

私はですね、こう見えても大学院に2つ行ってまして、最初の修士を取ったのが、このサンディエゴ ステート ユニバーシティ (San Diego State University) という所で、カリフォルニアの中にある州立大学の最南端にある大学です。

あまり有名じゃないかもしれないんだけど、卒業生はですね、有名な人で言うと、「ローマの休日」見たことありますか？オードリーヘップバーンではなくて、共演していたのはどなたでしたっけ？そう、グレゴリーペックが私の先輩になります。スペイン風の建物があって、すぐそこに海があって、太陽が燦々と降り注いでいて、青い空があって。そんな所に長く住んでいたから、こんな感じになっちゃったということです。

はい、いいですか。今までお話をさせていただいてお気づきだと思いますけど、私はかなりアメリカナイズされております。アメリカの講演会というのは、聞く側と話す側がインタラクティブ（対話）ですね。こちらが何かを投げかけたら、返事が返ってくる。オーディエンスの方からね。インタラクティブですよ。お互いに会話しながらやることですので、少し練習してみますね。例えば、私が何かを問いかけたら、手を上げるなり、うんうんとうなずくなり、いや違うよって言うていただくなり、「OK!」とローラ的にやっていただくなり。じゃあはい、今日の参加者の中で、学校関係の方手を上げてもらいましょうか。学校関係、OK。それ以外ほかに何がありましたっけ、林田さん。「行政関係者。」行政関係者、行政関係者、はい、こちら辺に行政関係者。行政関係者、OK よ。私は顔を覚えるからね。OK！それから？「外国人支援者。」外国人支援者の方、はい、手を上げて。OK です。はい、ありがとうございます。後は、うーんと、「私こんなだけど!？」って言うのは？「普通のおばさん!」いいですね。おめでとうございます。はい、同僚ですね。

はい、そんな感じでいいですか？インタラクティブでやっていきます。参加型じゃないと、特にこちら半分寝てしまいますのでね。お腹もいっぱいですね。私は自己紹介させていただきましたので、ここで皆さんに少しお互いに自己紹介をしてもらいたいと思うんだけど。私は何でこれを持って来たかと言ったら、ここは多文化のプラザなので、「こんにちは」「ありがとう」が、どういう言語なのかを少し表記してみました。

英語の場合は皆、基本的には中学校で習っているので、今日は一般的な話し言葉を書きました。“What’s up?” はい、皆さん一緒に!“What’s up?” “Up”ってというのは、上がるっていうことだから、「最近何が起

きてるの？」みたいな感じで。会ったときに“Hey what’s up?” “Oh Good!”という感じでいきますね。で、「ありがとう」は“Thank you”はよく言いますが、“Thanks!”お上手ですね。はい、これは英会話スクールではございませんけれども。で、次がポルトガル語。なぜかと言うと、私は日本語がまず母国語。そして英語をその次に勉強して、それから学んだのがポルトガル語だった。なぜならば、ブラジルに移住しようと思っていました。とても若い頃に。

なので、ポルトガル語は、はい、ケイコちゃん何だっけ?“Olá!” “Olá Olá” そう“Olá”。で、「ありがとう」が“Obrigada” “Obrigada”オブリガーダ。男性の場合は”Obrigado” “Ok, Obrigado” “Obrigada” “Obrigado” 女性と男性がいます。私、ブラジルに移住しようと思っていた矢先に、何が起こったかと言ったら、トルコ共和国に赴任になっちゃたわけ。あれれれ・・・一生懸命ポルトガル語を覚えたんだけど、ポルトガル語とトルコ語はサウンドがとても似ている。とってもよく似ている音があるんですよ。でトルコに行きまして、けっこう長く住んだのね。そしたら私のポルトガル語が全部トルコ語に置き換わってしまいました。

トルコ語の「こんにちは」は”merhaba,merhaba”そうですね。ありがとうっていうのがとても長いんですけども、”Teşekkür ederim” “Teşekkür ederim”。ちょっと難しいですね。トルコ語を話せる人は、この中にいますか?いないね。良かった。ちょっとしゃべってみようかな? (トルコ語披露) 雰囲気は分かっていただけでしたか?

それからトルコが終わったら、次にタイに行けと言われたので、タイに行ったんですよ。タイで「こんにちは」っていうのは? タイ語で「こんにちは」を言える人は? 「スワディカー」そうですね。「ありがと

う」は? 「コブンカー」ですね。そう。それで次ポーランド語、来週ポーランドに行くので、ちょっと乗せてみました。

“cześć”チャイシツチックみたいな感じらしいですよ。知らないんですよ、私。聞いたことがないから。「ありがとう」っていうのはね、”dzięki” ジーキー。そんな感じ。だからこの一週間で、一生懸命ポルトガル語ではなくて、ポーランド語を勉強しようというところに、今私はおります。よろしいでしょうか?

中国語を、声を上げて言ってくれる方はいらっしゃいますよね。中国語で「こんにちは」は「您好」。「ありがとう」は「谢谢」。スペイン語は? 誰かいる? はい、”Ola”。「ありがとう」は? それは間違っている。間違っている? あらら。「それはイタリア語!」本当? イタリア語? で、スペイン語は? Gracias! 良かったね、間違った物を持ち帰らなくてね。Gracias! Gracias!

これはイタリア語で Grazie! Grazie! Grazie! Ok ですね。今日は語学を学びに来ていただいたような感じなんですけれども、それ以外に私、こんな言葉しゃべ

こんにちは・ありがとう・何語?		
こんにちは	ありがとう	日本語
What's up?	Thanks!	英語
Olá	Obrigada	ポルトガル語
Merhaba	Teşekkür ederim	トルコ語
สวัสดี	ขอบคุณ	タイ語
cześć	dzięki	ポーランド語
你好	谢谢	中国語
hola	Gracias	スペイン語

れるんだよっていうのを、少し共有してもらいたいで。隣近所の2,3人の方で集まっていたら、ごあ

いさつしてもらいたいですね。「こんにちは」と日本語であいさつしていただいて、私、これ以外にもこんな言葉で「こんにちは」または「ありがとう」って話せるんですよっていうのを。ちょっとチームを作りましょうかね。

チーム、チーム、チーム、そこらへんでOKですか？じゃあ、ここは3人でチーム組んでくださいますか？何やるかわかりますか？いいですか？ここは3人でいいですね？ここらへんでキュット分かれてもらって、左右で何人かで、ごあいさつしましょう。多文化を体験していますからね、今私たち。多文化ですので。まず「こんにちは」ですね。まず「こんにちは」。私は誰々ですよ。Bom dia buongiorno.

— あいさつ体験 —



ここに上げた以外に、何が出ましたか？はい、”bonjour”。はい、何語ですか？フランス語。OK、他には？はい、「アニョンハセヨ」。はい、何語？韓国語。はいOK。「ドゥメラマ」はい、ここで質問です。何語でしょうか？ツワナ語？ボツワナ語？ツワナ語？！私の中で、今ボツワナはけっこうブームだけでも知らなかった。あ、そうなんですか。素晴らしい！どこにあるの、ボツワナって？「アフリカの、南アフリカ共和国の北にあるのがボツワナです。」ありがとうございます。Ok「ジャンボ！」ジャンボ、聞いたことあるよね。はい、どこですか？

アフリカ広うございますよ～！「Kenya！」大正解です！ジャンボ！じゃ、皆さん一緒にジャンボ！

はい、お隣同士で知り合っていましたね。次、私はいつもこの絵を使うんだけど、世界の中心にいるのは子どもたちです。子どもたちが、いつも私たちより世界の中心にいます。で、一番そのそばにいるのが親御さんだったり、あとは養育者の方だったり、いろんな方がそばにいらっしゃいます。子どもを守っている。子どもを支援している一番の人がそばにいるお母さんだったり、お父さんだったり、おじいちゃんだったり、おばあちゃんだったり。その周りには、今日参加してくださっているような方で、子どもやお母さん、お父さんを支援している方だと思います。学校の先生だったり、教育委員会だったり、いろんな方がいますよね。子育て支援者だったり。そしてその周りに支援者の支援者っていうのがいます。

支援者の支援者っていうのは、お友達だったり、同僚だったり。専門家というのは、心理だったら私みたいな専門家だったり。支援というのはどんどんどんどん広がります。東北へ行って調べた研究結果があるんだけど、ストレスレベルって、大変なことがある本人よりも、それを支援している人たちの方が、ストレスの数値が高いということが分かった。

東北の震災のあとにすぐ調べた。ということは、ここにいる方は皆子どもだったり、親御さんだったり、いろいろな形でいろいろな支援に携わっていらっしゃる方なんだけど、それって自分自身がやっぱり支援される必要がある。自分自身も、大事に、大事にしてもらう必要があるんですね。それを知ってもらいたいですね。自分は大丈夫と思わないで。自分もとっても大切にしてもらって、支援をしてもらう。そういうのが大切なんだよということを知ってもらいたい

ので、こういう輪をいつも、いつも使わせていただいています。

はい、で今日は多文化ということと文化ということを中心に少し話します。

私と多文化との繋がりにどんなのがあるかと言ったら、アメリカに長く住んでいた時に、スクールカウンセラーとして学校に行きますね。そこで子どもたちの様子を見るっていうこと。あとはクリニックで子どもたちを見る。見て、プレイセラピーをやるんですけど、遊びながら子どもたちをセラピーする。それとダブルの子どもさんなんかの心理アセスメントをして、それで成長段階だったり、もし必要だったらどんな支援をするのか、アセスメントをしたりしています。

あと、ファミリーサービスというのは、例えばね、子どもが悪いことをするじゃない。そうすると親がどうするか。子どもを連れて来て、「先生、この子どうにかしてください。」「この子、物を盗むんです。」「この子ウソをつくんです。」「親の言うことを聞かないんです。何とかして！」って言うのね。でも、実際その子の問題行動ってというのは、だいたい親がその子にどういう風に接しているか。または夫婦の間のコミュニケーションがどういう風に行われているか。それに反応した子どもが問題行動を起こしたりしているんですよ。なので「この子を何とかしてくれ。」って連れて来られても、その子によほど何かがあれば一対一でやるけれども、そうでなくて、どちらかと言うとお母さんとお父さんを連れて来て、子どもを置いて、真ん中で、皆で一緒になってセラピーをする。そういうアプローチがあって、そういうのを私はやっています。

海外赴任。さっきも言いましたけど、海外赴任をいろいろしまして、トルコに住みましたし、あっちこっち行きました。最初の大学の学位は、コンピューターサイエンスだったんですよ。スティーブ ジョブズさんですか。ウィンドウズの創始者は誰だっけ？ビルゲイツ、そうですね。あとはソフトバンクの創始者は？孫さんね。コンピューターを学んだんですね。孫さんと同じ年度の卒業生なんです。彼はUCLAですけどね。その時代はどんな時代でしたっけ？泡がぶくぶくしている時代でしたね。バブリーだったんですね。エンジニアで英語ができたので、なかなか重宝されました。すごく面白い時代を送りました。それはその分だけ、パワハラ、セクハラという言葉は、その時代にはまだありませんでしたが、やられることすべてやられました。そういう時代をずっと生きてきました。少ないですけど、20カ国くらいですかね。いろいろと見せていただきました。

今は、日本人以外の方へのカウンセリングも、どうやって聞きつけてくるのか、突然英語のメールが届くんです。「カウンセリングをしていただきたい。今私は四国の香川というところに住んでいるんですけど。」と。そういうときは、スカイプを使ってカップルセラピーとかをします。カップルって出会いの時は素敵。結婚して1年くらいは素敵。そのあと子どもができて、国際結婚の場合、子どもの育て方とか、いろいろなものがずいぶん変わってきてしまうので、そこで夫婦の深刻化が始まる。そのあたりで、カウンセリングをお願いします、というのがあるので、それはやっぱりしています。性格が新しいものが好きなものですから、いろいろな文化の中に入って、今まで生きてきたというのが自己紹介です。いいですか、私の人生を、今語ってるんですよ。

多文化的 Multicultural

◆さまざまな人種、民族、階層がそれぞれの独自性を保ちながら、他者のそれも積極的に容認し共存していこうという考え方、立場。(ブリタニカ国際大百科事典)

多文化の定義を、少し探してみました。そしたら「様々な人種、民族、階層がそれぞれの独自性を保ちながら、他者と積極的に行動し、共存していこうという考え方」というのがブリタニカで見つかりました。私たちがいうのは、私たち自身の独自の文化がありますよね。それを大切にするんだけど、他の人が持っている独自の文化っていうものも、私が大切にするっていうこと。例えば、ブラジル文化だったら、ブラジル文化を持ってらっしゃる方にとって、とても大切なことがありますよね。私は日本文化も大切だけど、そこに友人として加わった、ブラジルの文化を持ってらっしゃる方も受け入れて、共有して、共存して、大切にする。そういうことが多文化なのかな、と理解しました。

アメリカ合衆国というところに住んでいて、合衆国というのは、いろんな民族が移民していたんですね、200年ちょっと前くらいにね。で、移民して、いろんな民族が交わり合いながら、戦争したりしながら、一つの国を作り上げていった。サンディエゴというのは、メキシコとの国境なんですけど軍があるんです、海軍が。そこから戦地にも行き、そこから帰ってくる。尚且つ、アメリカというのは過去にさかのぼっていくといろんな戦争をしていますよね。なのでその戦争で来た移民たちも、たくさん住んでいるんです。ベトナム、

そう。ベトナム人がすごく多い。そしてフィリピン。最初看護師さんを入れようとしていたんだけど、難しく、日本は今、福祉の分野で介護さんを入れようとしています。でもアメリカのサンディエゴには、フィリピン人の介護さんがたくさんいます。フィリピン人のホスピタリティは素晴らしいものがありますね。国籍に人関係なく、ものすごく手厚く世話をしてくださるといふホスピタリティがあるので、私は割と大きな総合病院に勤務していましたが、その看護師さんはほとんどがフィリピン人でした。そういう文化があったんですね。

多文化に関する教育ってところですが、私はサンディエゴで、2校の大学院に行ったんですけど、大学院には多文化を学ぶというプログラムがあって、27人の同期は世界中から集まってきました。たまたま私も選ばれて、その中には白人、黒人、アフリカ人、さまざまな方がいます。あとはダブルの方など、いろいろでした。人種的にはそうだし、他の分け方をするとLGBTね。あと正当防衛なんだけど、恋人を殺してしまって、服役をして社会復帰するために参加されて来た人もいました。なぜかと言うと、マイノリティだったり、苦しい経験がある人たちが教養を得て、一歩先に進んで、そういう人たちの声の代弁をしましよ、社会をよりよく変えようよ、自分以外の文化を皆、知って、知って、それから次にいきましょうよという、リーダーをアドボケイト、育てようというプログラムだったんですね。

非常に厳しくて、女性は平均8キロ太った。男性はほとんどガリガリになった。ストレスの出し方が男性と女性は違うのかなと思ったんですけど、それがすごくハードなプログラムで、それをね、朝から晩まで教授と我々と向き合いながらやる。世界中から集まっているので、世界中に帰って行っても、アメリカに帰

って行っても、自分がそういう文化を変えていくんだ、アメリカをもっと良くしていくんだ、世界をもっと良くしていくんだっていう、リーダーを作るようなプログラムだったんです。そこはマスターだったんで、そこからドクターに行って、それから社会に出て行くんだっていう人を育てるプログラム。だからアメリカって、実際に「多文化」を皆に波及するような人たちを育てるといふプログラムがしっかりある。さてこれは日本にあるの？と言ったら、日本にはなかなかないのかな、と思いますね。

文化 = カルチャー/Culture

- ◆ **国籍 / Nationality**
 - ⊙ **人種 / Race**
 - ▲ 皮膚の色・骨格等の生物学的特徴で分類
 - ▲ 地位・職業・経済状態などのちがいで分類
 - ⊙ **民族 / Ethnic group:**
 - ▲ 言語・宗教などの文化的伝統
 - ▲ 歴史的な運命を共有する
- ◆ **年齢、生物学的性別、Gender**

..... 1

では文化って何なの？文化っていうのはカルチャー。日本の中で多文化って、いろいろな外国にルーツを持つ人たちを支援しようっていうのは素晴らしいことなんだけれども、私たちがそれをどう分けるかと言ったら、国名で分けていませんか？「なに人」とか、「なに人となに人のダブル」っていうのもあるけれど、国籍をまず重視して、あの人は「なに人だから」っていうのがすごく多い。でも国籍って、そんなに単純なものではない。国籍って、人種があって、民族があって、人種の中には肌の色とか、顔の骨格、作りとか、そういうものが入っていますね。で、アメリカの場合は様々な色があります。白、黒、茶、赤、黄色そんな感じですよ。赤ってわかります？聞いたことある？ネイティブインディアンね。赤、レッドって言いますね。イエローは、日本人とかをイエローって言いますね。

ブラウンは、人によって違うんだけど、スマトラあたり。ちょっと日本人よりもダークな色合いだけれど、思いっきり黒人ではない。人によったら、中米辺りもブラウンって呼ぶ人もいるし、はっきりした事はお伝えできないけれど、そんな感じで分かっているし、地位とか職業とか、経済的な状態なんかでも分かれています。あ～あの人たち、そういう人種だよって日本語で良く使うじゃないですか。そういう時に肌の色じゃない形で分けたりしますよね。あとは、民族なんかは、言葉、宗教というのもありますね。だから「なに人？」の中にそんな情報は全部入ってはいないけれども、決めてかかっちゃうようなこともある。私もあった。

サンディエゴでカウンセリングする時に、白人のクライアントは白人が持って行ってしまふ。で、黒人とかアジア人とか、よくわからないところの人っていうのは、「テリーお願い。」って言われるわけ。あれ？と思ったんだけど、他の人たちは、黒人は黒人を診るし、白人は白人を診るし、残り全部が私のところに来るって感じだから、同じクリニックの中でも、私だけがインターナショナルな訳ですね。すごく多文化になってる。そういう経験があったから、私自身も「なに人」って分けるのは、わからないわけではないんだけど、あとでゆっくり考えてみると、まるっきり白人なんだけど、実は内戦がずっと続いているヨーロッパの小さな国からの移民もいるし、肌の色や、「なに人」っていうのでは、その人は全然計れないんだなどというのは身にしみて感じました。

それ以外に、生物学的性別、そして今はジェンダーという考え方もありますよね。ジェンダー、知っていますね？知らなかったら、あとで個人的に聞きに来てくださいよ。だから日本人の場合には、日本人っていう顔形も似ているし、肌の色も同じだし、経済的に

もだいたい中流家庭だし、なんか「日本人」って代表しますよね、っていうのがありますよね。赤ちゃんが生まれたら神社に行ってお祝いをするし、結婚する時にはウェディングドレスを着て、教会に行ってお祝いをするし、誰かが亡くなったらお寺に行ってお坊さんに手を合わせていただいたり、宗教について日本人はマルチプルで、よくわからないものがあるんだけど。日本人のほとんどがそんな感じですよ。クリスチャンの人は、日本の中で1%の数を越えたことがないわけですよ。で、「宗教は？」と言われて、日本人ではっきり答えられるというのは、非常に少ない。でもそれが日本の文化。だから日本人って、日本文化ってこんな感じだねって括れるところがあったんだけど、実はそうでもないっていうのが、最近私が仕事をしている環境の中から見えてきた。

日本に住む子どもたちの声。4人程インタビューしてきました。16歳女子、日本人と中国人のダブル。14歳男子はネパール、日本。11歳がスペイン、日本。10歳が日本、カナダ。で、(映像を見ながら)初めて見た国旗ってありますか？1番はどこの国旗？スペイン！2番は？3番は？4番は？ネパール！ネパールってあんまり見たことがないなあって思ってたんだけど。

で、彼らに話を聞いたら中国人とのダブルの彼女は、顔は中国人。4人が4人とも日本語がパーフェクト。4人のうち3人は日本語しか話せない。だけど顔は強い方が出るので、ネパールだし、スペインだし、カナダ人の顔をしています。だけどその言語は、カナダ人だけ完璧なバイリンガルで話せるけど、他の3人は日本語のみです。で、日本で生きていく。うち2人が学校に行けていません。で、この4人はどこで知り合ったかということ、神奈川県の方の方に塾があるんですけど、その創始者が昭和のはじめくらいにメンタルの病気をなされた。それで医療機関にかかれて良くな

られた。「ああ、よくなった。僕は社会のために何かをしたい。」そして塾を立ち上げられた。立ち上げたのは、彼は東大出身だったので、頭がすごく良くて、自分にできるのは勉強を教えること。だけどそこに通ってくる子どもたちというのは、勉強がうんぬんじゃなくて、学校に行けない子どもたちが集まるので、今で言うひきこもりね。そういう子どもたちを集めてた。それが昭和7年くらいから始まった。今は彼のお孫さんがやってらっしゃいます。そこにこの4人が通っている。彼らと話を聞いてみたら、塾の良いところは、楽しくて様々なことを知ることができる学びの場であること。人間関係を学べること。私これ聞いた時、あれ、学校って人間関係を学ぶところじゃないのかなあ、って思いました。塾は自由であることがいい。自由に思ったことを発信して行動できる。まずは何でも聞く耳を持ってくれる。じゃあ学校は聞く耳を持ってくれるところじゃないんだ。で、日本の学校への疑問点は、事務室だけにクーラーやヒーターがあって先生たちだけが特別待遇されている。それが許せない。子どもたちはすごく主張があって、いっぱいしゃべってくれるんだけど、実際にこれを学校に言ってるのかなあ。言っていない。たぶん、塾で学んでいる。

もう一人中国人のお母さんにもインタビューをしました。日本に来て15年。2人子どもが日本で生まれました。上の子が中学校2年生、下の子が小学校4年生。いじめについては小さな、小さなころから子どもに教育していた。この中国人のお母さんからすると、いじめは小さなころからあった。それがすごく悲しかった。夕食の時にいっぱい話すんです、私って。今日あったことも、楽しかったことも、悔しかったことも。私これ、中国人ってすごいなって。日本人って楽しかったことしかしゃべらないことが多い。辛かったことをあんまり会話にしない。でも「辛かったこと、今日は何？」って聞いてくれるお母さんって、すごいお母

さんだなんて。中学2年の息子が母親に、「友だちと
いっしょの時は日本語で話してください。」って願
われて、お母さんはすごくショックだった。だって中
国語で話すことはプライドだと思ってるし、母国語だ
し、何で友だちの前で日本語で話さなきゃいけない
の？だけどこれって、子どもが日本の社会の中で生き
ている。家庭では中国語をしゃべっている。親の文化
もちゃんと守りながら、でも新しい文化を吸収するこ
とも求められながら、その両方を活かせる場で生きる
ことを求められる。

最後、学校で海外研修があるのね。頭のいい子なの
で、海外研修に親は行かせたい。でも本人は行きたが
らない。なぜかと言うと、パスポートが違うから、入
国審査の時に別部屋に呼ばれる。それをずっと経験し
てるのね。友だちと一緒にいった時には、自分だけ別
部屋に呼ばれるというのは、やっぱり嫌なんだ。プロ
セスが違うから嫌なんだ。だからいっしょに研修に行
きたくないと言ったりしている。お母さんはすごく悩
んでいる。「チャンスなのに何で行かないの!？」親
は彼の将来を考えると、もちろん中国もちゃんと持っ
てもらいたい。日本語も日本の教育も、日本人の部分
もちゃんと持ってもらいたいけど、子どもの将来を考
えたら、アメリカで生きるという可能性も与えてあげ
たいから、アメリカにも連れて行っている。1年置き
に夏休みは中国に行く、アメリカへ行く。そういうふ
うに、すごく家の中で期待をされている。この子、中
学2年。学校の勉強もしなければいけない。おまけに
進学校に行っている。でも中国の文化も守り、おじい
さん、おばあさんに1年に1回は会いに行かなければ
ならない。何て忙しい子なんだろう。

海外赴任を経験された先生にもお話を伺ったら、そ
の先生、ラオスから来てる子どもさんがいらっしやっ
たので、「今日のラオス語講座」をいうのを前に出て

きてやってもらったりしたんだって。それはね、文化
を知るチャンス。先生にとっても、生徒たちにとつ
てもそうだから。彼が言ったのは、先生つまり大人がお
もしろがることに、すごく価値があるんだよ、って。
大人は子どものことを、子どもが話す内容とかに興味
を持つということが、すごく大切なことなんだよ、っ
ていうこと。

興味を持って “Interesting ♡”

- ◆ “Tell me more about you.”
- ◆ “Interesting! Tell me more!”

- ◆ 「もっと知りたい、教えてえ。」
- ◆ 「うん、うん、それで？」
- ◆ 「面白いって言うか、興味深い。」
- ◆ 「へー、日本とは違うんだね。」

5

もう1人、スクールカウンセラーの声。外国にルー
ツがあっても日本にルーツがあっても、同じ子どもな
んだよって。好奇心と客観性を持って鳥瞰という目で
全体を見るっていう、そういう感覚で子どもたちに接
してほしいというのが、その方の言葉でした。興味
を持ってというのは“Interesting”って英語で言うん
だけど。日本語にすると「おもしろい」になるだけ
ど「興味深い」っていう言葉に訳してもらいたいんで
すね。「あなたのこともっと話してよ。」「もっと教
えてよ。」という会話がすごく多い。

“Interesting!” “Tell me more! Tell me more!”

「もっと話して、もっと話して!」っていうのがある。
日本語に置き換えると、おもしろいというよりも、興
味深い。そういう感じで子どもたちに話しかけて、そ
して興味を持って話を聴いてもらいたいんだ、ってい
うのがスクールカウンセラーだったり、海外で研究し
た先生だったり。興味を持って相手の話を聴くという

だけで、その子は話したいって思うし、もっと話してくれるし。だっておもしろいんだよ。私と先生との違いは何かっていうと、私は指導はしない。なぜならば、心理の担当だから。心理のところに来る子どもは、問題を抱えていて、指導を受けるような余裕はない。だから私は、聴いて、聴いて、聴いて聴く。その子が話したいことを聴く。聞き出したいことではなくて。それが私の役割。だから外国にルーツを持つ子どもに接する人たちも、私と似たような感じで、指導ではなくて、困って来てるのだから、聴いて、聴いて、聴いて、聴いてあげてほしい。

最後に1分だけ、2人でペアになっていただいて。はい、ちょっと会話をしてもらいたいですけど。自分のこと何か一つを相手に話して、聴いた人がこの言葉を言ってほしいんですけどね。「私、教師なんですけど。」って言ったら「うんうん、教師。興味深いね。」「それで？」っていうような会話をちょっとだけ経験してほしいの。いいかな！では始め！

— 会話の実践 —



「すごーい！」とか「へえー、そうなんだ！」とか。聴いてもらったら、交代してね。ボランティアしていたら「へえー、ボランティア！」って言ってね。「うんうん、それで？」って具合にね。OK！ありがとうございました。お話できましたか？興味深いって言ってもらった？うれしかった？他にありますか？時間がなかったの、次回機会があったら、お話ししましょうね。

人間関係は、

お互いにわからないところから始まります。
つまり、わからないとき、わかろうと思うから、人は相手にかかわろうとし、コミュニケーションが始まります。

♪♪何て素敵な出会いなのでしょう。♪

最後に、人間関係はお互いにわからないところから始まります。わからないときにわかろうとするから、人は関わろうとするからコミュニケーションが始まります。なんて素敵な出会いなのでしょう。こんな出会いを、いっぱい持ってくださいね。ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。それでは続きまして鶴見中学校の土屋先生、桜美林大学1年でブラジルで国籍の根本ケイコさんにお話をいただきまして、その後、質問シートにご記入いただきたいと思います。

土屋 隆史さん

横浜市立鶴見中学校教諭

みなさんこんにちは。鶴見中学校の職員の土屋と申します。本日はお時間をいただき、私からは学校現場の視点から、皆さまに実際の状況をお伝えできたらと思っております。話すのが下手で、すごく緊張しやすいので、お聞き苦しい点が多々あるかと思いますが、どうか御考慮頂ければと思います。

まず皆さまにお考えいただきたいのは、こういうことです。ある日皆さんが、全然知らない国の大学に行って授業を受けなさいと言われて、その授業を、言葉も通じない授業を聞き、レポートの宿題が出て、2週間後にはその授業のテストがあります。皆さん、どんな感じがするでしょうか。今、小学校や中学校に、日本に来たばかりの子どもたちがたくさんいますが、そういう気持ちになっているのが外国から来たばかりの子どもたちだと思います。私からは、本日、国際教室というものについて、また国際教室からみてきた問題点を3点ほど、またその中で、指導の中でよかったなと思うところを2点、そして私の願いということで、お話をさせていただきたいと思っております。

まず国際教室ということですが、よく我々学校の教員であっても、国際教室と国際理解教室の区別がつかない人がたくさんいます。国際理解教室というのは、日本人の児童生徒にいろいろな外国の文化を学んでも

らおう、そういったものを重点に置いておりますが、国際教室というのは日本語が不自由で日本語指導が必要な子どもたちが日本語指導、もしくは教科指導を受けるところ、というのが国際教室です。国際教室はすべての学校に配置ができるかというところではございません。理由がございます。外国籍で、なおかつ「要日本語指導」、要は日本語指導が必要な外国籍生徒が5人以上いてはじめて教員が1人加配、国際教室というものが設置されます。5人以上いる場合はどうかというと、今度は20人以上そういった児童・生徒がいると、2名加配になります。じゃあ、イナバ物置のように100人いたらどうなるのか。2名は2名のまま、20人以上という状況になります。横浜市の中では現在、小中学校あわせて70校ほどに国際教室が設置されております。中学校だけ言えば、横浜市内に150校位あるんですが、そのうちの17校。でまた区によって多い区とそうでない区がございます。

私がいる鶴見中学校、鶴見区は外国につながる子どもたちは非常に多い区になりますので、横浜市の設置校の中のほぼ四分の一は、鶴見区内の小中学校ということになります。なぜ鶴見区に外国人が多いかというと、京浜工業地帯の働き手として増えている部分。また、以前から多かったんですが、そういう形で外国の方がたくさん住んでおりますので、それをつてに、どんどん新しく入ってくるという状況です。鶴見中学校の中に関していいますと、全校生徒550名近くおりますが、外国籍の生徒が30名ちょっと。また、外国につながる生徒で日本国籍を持っている生徒は20名ちょっといます。またこの1学期だけでも、4人が外国から入ってきております。この夏休み中にも、まだ、日本には来ていないけれど、2学期からこの学校に通いますよという予約が3名。ということで、非常に、どんどんどんどん増えています。で、その中から私は、



土屋 隆史さん

ずっと国際教室を担当しておりますので、その見えてきた課題を3点ほどお話させていただきます。

先ず、いつ日本に来たのか。つまり小学校で日本に来たのか、中学校で日本に来たのかという点についてです。小学校で入ってきますと、やはり授業だけでなく、休み時間に一緒に遊んだりですとか、一緒に掃除をしたりですとか、そういったことで小さい子は日本語を覚えるのが速いですね。ですから、中学生よりも、ある意味、日本語会話の習得は非常に速いと思います。しかし母語の確立という点で考えますと、やはりまだ、母語がほとんど確立されていない中で新しい日本語を入れてしまうということで、できる子は両方とも素晴らしいですが、できなくなってしまうと、「ダブルリミテッド」という形で日本語も中途半端、母語も中途半端。それこそ小さい子が話すような母語しかできない問題が生まれてきます。

また高校入試に関して言いますと、4年生以降に入ってきた子に関しては、時間が1.5倍に延長されるとか、問題にルビがつくというような優遇措置はございますが、それよりも前に入ってきてしまいますと、もう優遇措置はございませんので、日本人の生徒と一緒に受験をしなくてはならないという問題があります。では中学校で入って来た方がいいのかと言うと、卒業までに3年間しかありません。小学校であれば卒業すればとりあえず中学校に行けますが、中学校の場合は自分で高校受験を突破して、自分の道を切り拓かなくてはならないという面があります。じゃあ、時間がかなりあるのかというところでもない。まだ中学校1年生ぐらいで入って来た子であれば、まあ、日本語は受験までに何とかできるんですが、最近本当に多いんですが中学校3年生で日本に来た場合、高校入試のテストの問題っていうのは、日本語しかありません。もちろん、漢字にはルビが振ってありますが、ルビの問題で

はない。答えも日本語で書かなくてはいけない。そういった部分に難しさがあります。

また日本語の習得に関して言いますと、ある程度母語は確立しているの、中学校で入ってきた子の場合、母語で言葉を教えたり、母語で教科を教えるといくと、小学生の頃よりもスムーズに理解をしてくれる子がたくさんいます。ただし、その子の出身地域によって学力の差がかなりあります。中国ですと、日本よりもスパルタ教育ですから、宿題もどっさり出されるといことで、数学、英語なんかは日本人の子よりもかなりできる子がいます。で、うちの学校にいる中国から来た3年生の生徒。もともと中国でエリートだったんです。中国にいる時から目標の大学は北京大学とか東京大学ではないんです。うちの学校に入ってくる時にお母さんが言っていたのは、「私の子どもの目標の大学はハーバードです。」と。確かにできます。その子、日本語ができなくても、いきなり、数学、英語は学年でトップを取りました。ですから、できる子はできる。だから日本語ができる、できないという問題ではなく、現地での学力は日本に来て、ほぼ比例していきます。ということは、現地でもともと学力が厳しかった子が、日本に来てできるということはほぼない。もともと現地でできなかったのに、更に日本語という高い壁があり、そこを突破して教科ができるようになるかというところ、そうはうまくはいかないので、やはり日本語ができるかどうかではなく、現地の学力を引っ張ってきます。ですから中学校でも、かけ算九九をひたすら教えてる子もいます。まだ分数ができないくらいならいいんです。かけ算ができない子も結構います。

2点目、学習意欲の問題。今まで、何人も外国から来た子たちに会っていますが、その中で1人だけでした、自分は日本に行きたくてしょうがなかった、って言ったのは。それ以外の子たちは、「日本にはもともと

と行く気はなかった。だけど親が呼び寄せた。親が来いって言ったから、仕方なく来た。」と。ですから、もともと来たくて来たわけではないので、学習意欲という部分は非常に低い。中にはおじいちゃん、おばあちゃんに育てられたけれども、おじいちゃんが交通事故で亡くなってしまった。で、急にそれこそ、1ヶ月前ぐらいに突然来ることになってしまった、っていうような子もいました。ですから、もともと、勉強・学習意欲が非常に低い部分がある。また外国籍の保護者も、日本での生活を維持するのが非常に大変です。たくさん仕事をしなくてはいけない。夜の仕事もあったりする。そうすると子どもの時間帯と合わないんですね。で、よく学校って保護者の「はい、これサインをもらってきなよ。」「これ印鑑もらってきなよ。」「これコメントもらってきなよ。」というのがあるのですが、とても保護者には書いてもらえないという家庭がたくさんあります。当然、親としても子どもの教育に関しては非常に心配だし、非常に関心を持っているんですが、親の生活のリズムや時間帯と、子どもの時間帯が合わない。ですから、全然顔を合わせないし、会話もしない。子どもが出る時に親は寝ている。子どもが寝る時には親は帰ってきていないという家庭もたくさんあります。ですから全体的には意欲が上がるような状況にはないという実態があります。

今度は、3点目、発達障害の部分です。日本の児童生徒であっても発達障害という部分が問題になってきていますが、外国から来た日本語が分からない子で、発達障害だろうと思われる生徒は、たくさんいるんですね。ただし、それは日本語ができないからこういう行動になっているのか、それとも文化が違うからこうなのか、日本人で日本語ができる子であってもその判定というのは非常に難しいんですが、外国から来た子の判定はさらに難しい。それプラス、保護者の理解がなかなか得られない。日本の学校の場合は、学校の中に個別支援学級というクラスがあって、いろんな行事なんかは普通級の子と一緒に行動しますが、授業や勉強の段階になると、個人個人に合わせた勉強をするというクラスです。外国の保護者の方には、なかなかそこは理解してもらえない。外国では、そういったクラスというよりも、完全な重度の養護学校はあってもその中間の存在がないので、「この子はもしかしたら、これこれこういう状況だから、検査を受けた方がいいかもしれません。」というお話をしても、「うちの子はそんな馬鹿じゃないから。」「うちの子は違うから。」っていう風に判定の前に突っぱねられてしまう。ですから、そこをいかに理解してもらおうかという話をしていくのが、非常に難しいところです。



自信を持たせるためには、じゃあ、どうすればいいか。ある中国人の生徒のケースなんですけど、もう睡眠学習。休み時間は、中国人の生徒と集まって中国語の会話。次の授業が始まると、また睡眠学習。で、放課後は部活に入らないで、家に帰ったら夜遅くまで中国語のインターネットという生徒がいました。何とかできないか。私、国語の教員なので「中国人だったら少なくとも漢詩ぐらいはやったことがあるだろう?」「うん、小学校の時、勉強した。」「わかるよな。」「うん、わかる。」「じゃあ、これを日本語の書き下し文で読んで覚える。」ちょうどそのクラスが、暗証、よく中学校で暗証みたいなテストがあるのですが、じゃあ、やってみろということでやらせて、クラスで発表させました。そうすると、その子自身もハードルは中国の漢詩だったので高くない。ま、日本語で覚えれば何とかかなる。でも他の日本人のクラスの子からすれば、この子は基本寝てるからできないだろう、日本語もできないだろうと思っていたのに、それができた。ということで日本人の子たちもすごく喜んだんですね。その中国人の生徒も、自信を持ってそれ以降は一生懸命やるようになりました。周りの全然やらなかった中国人たちも、「あいつが変わった。」ってことで、「じゃあ、おれもやんなきゃ。」となり、相乗効果で良くなった例がありました。すべてではないですけど。

あともう一つは、ネパール人の生徒。これも国語なんですけど。春はあけぼのという枕草子がありますよね。あれが中学2年生ですと、春はあけぼの作文ということで、それぞれ春夏秋冬、自分が考えるいいところを探してスピーチをしようということで、そういったスピーチがありました。で、来たばかりのネパール人の子にも、とりあえずそれを英語で書かせて日本語に訳し、それを覚えさせて発表させました。ネパール人の子は、日本人に無いような視点を持ってくるんですね。「ヒマラヤの雪解け水が」とか、とても日本

人には書けないものを書いて発表した。で、それもやっぱり他の日本人の子たちは、「すごい!この子こんなに日本語できると思わなかった。」というわけで、拍手をいっぱいしてくれて、その子も自信を持ったということがありました。ですから、できないことをできるようにさせるよりも、どこか一つ、何かできそうなどころから自信をつけさせる。まあ、当たり前のことなんですけど、それが一番の早道かなと思います。

じゃあ、根本さんも含めて、我々、国際教室の教員の願いとすれば、本当に先ほどもございましたが、「なに人」とかではない、地球人という感覚を持ってほしい。で今、話していきますとニュージーランドは羊をたくさん育てている。それは羊毛を取るためにやっているんですが、最近はあまりセーターも着ず、どちらかというとフリースになっている。日本人もセーターよりもフリース。それが、ニュージーランドにも影響が出ているようで、今、羊毛をつくっても売れない。なので、羊から牛に切り替わっているそうなんです。で、牛に切り替わったがために、今度はその牛のフンでニュージーランドが公害になっている。だから、一つの国のいろいろな流行が、他の国の経済とか環境にも影響を及ぼす。ですから、これからの日本の教育、ま、世界もそうだと思うんですけど今、ここに住んでいる子どもたちというのは世界の財産で、ますますこれから世界はグローバル化していく。そういった中で、いい思いをしてもらいたいというのが我々教師の願いです。ですから、もう、昔みたいに学校単独でやる、地域単独でやる、行政単独でやるという時代ではなく、皆さんと協力して「なに人」ではなく、グローバルな地球の宝物として育てていかなくてはいけないなと考えております。すみません。へたくそなお話で。以上になります。

根本 ケイコさん

桜美林大学1年 ブラジル国籍

私は、自分の経験を話します。ブラジル出身で8年前に来日しました根本ケイコです。今、大学一年生なんですけれど、本日は3点ほどお話しさせていただきます。

まずは、日本で経験した中で最も皆様に伝えたいことです。先ほどの話にもあったんですけれど、日本が特にこれから力を入れるべきことは、外国人が住みやすい環境づくりだと思います。まず、子どもたちが最も大事にしていることだと思うんですけれど、「楽しい」ということですよね。日本に来ているのは自分の意志ではなく、ほとんどの人たちが両親の事情や経済的な事情で日本に来ています。彼らは自分の意志で来ていないのに、全く分からない言語、言葉の壁、文化の壁に苦しみながら学校に通っています。そこで彼らに、どうやって楽しいと思わせるのが、これからの課題だと思っています。

私の例なんですけれど、住んでいる地域にはほとんど外国人がいませんでした。ですから、そういう国際教室ですとか日本語指導はあんまりなくて、小学校5年生に来ていたため、日本人の生徒も外国人というのが異色の存在として見られていました。それは自分の中でも苦しいことでしたし、日本語で話せないということは、言い返せないということもあって、中学校にあがって不登校になってしまいました。その時にいっぱいどん底に落ちて、立ち上がったその原因は、日系ブラジル人で、このプラザで働いている園田さんとの出会いでした。彼女は日本語も話せていて、ポルトガル語も話せていて、日本語が話せない両親の通訳もなさっています。彼女を見ていてロールモデルとして、今の私はこれじゃまずいんだと思って、日本語を話せなかったら、ブラジルに帰ってポルトガル語も話せな

い、日本語も話せていない私は、中途半端な立場にいるんだと気づきました。

私は今、バイリンガルというより、たぶんセミリンガルといったほうがいいぐらいです。日本語を話せませし、ポルトガル語も日常会話は話せます。ただ新聞を読んでも、「何これ？」というのはたくさんあります。なので、私が日本の学校にもっとも必要と思っていることは、「その二つの言語を持っていてもいいんだ。」「あなたは、あなたのままでいいんだ。」ということです。日本人化する必要は、全くありません。だって私たちは二つの言語が話せませし、日本の社会に貢献もできますし、自分の国への貢献もできます。私が通訳になりたい理由は、もちろん、日本に来る多くの日系ブラジル人やペルー人のためでもあるんですけど、日本のためでもある。自分の国のためでもある。二つの立場に立てるということは、自分の強みだと思っています。ですので、それを学校で伝えるということが最も重要なことだと思っています。

知り合いの話なんですけれど、彼女は小学校3年生の時に来日しているペルー人なんです。愛川町ってご存知の方いますか。愛川町は外国人がとても多いんですよ。そちらの小学校では、給食で外国の食べ物を出したり、彼女が来日した時は、校長先生が集会でいろんな言語、毎回、違う言語であいさつしたそうです。



根本 ケイコさん

それは外国人のためだけではなく、日本人も「あ、なんだ、面白いんだ。」「こんな食べ物もあるんだ。」「こんなあいさつもあるんだ。」と、興味を持ってくれるような、

“interesting”ってことが大事だと思います。だから今大事だと思うことは、その外国人が住みやすい場所、日本人が興味を持ってくれるような環境だと思っています。ごめんなさい。ちょっと矛盾しているんですけど。

2点目は、自分を含めて外国人が知ってもらいたいと思うことです。ひとつは、これはとても、学校に携わる人たちに言いたいんですけど、日本語が話せるから日本の勉強ができるというわけではないんです。これは全く別です。日本語が話せるから勉強についていけるわけではない。教科書開いても漢字が読めない。教科書開いても、こんなこと初めて知ったということがたくさんあります。数学もそうです。言語ができるからできるというわけではなく、私はブラジル出身で、数学の教育が結構日本からは遅れていたんですね。なので、小学校5年生で来ても分数が全く分かりませんでした。でも、先生に聞いても説明聞いてもわからない。割り算もやり方は違うけど答えは一緒。「なに？」っていうのがたくさん。数学でも「何で違うの？」ってことがたくさんありました。だから言語ができるからって、勉強ができるわけではありません。あとは国際理解教室について、今はちょっと理解できるんですけど、日本は特に英語に力を入れてますよね。それはちょっと、私からしたらなぜだろうと思うんですよね。確かに世界では第2の大きい言語で、みんながしゃべっている言語なんですけど、スペイン語だっそうですし、ポルトガル語もすごく最近では重要視されています。なので、マイナーで、しゃべられていない言語にも興味を持ってくれるような環境作りがすごく大事だと思います。私に来たときはブラジルって

いうとサッカーとか、サンバのイメージしかなかったんです。ただ、それだけではないんです。移民とか、全く違う国でゼロから日本人が作り上げた歴史もあります。ブラジルに行って苦しい思いをして、それで私もいますし、園田さんだっています。ブラジルには多くの日系ブラジル人がいます。その歴史については、多くの日本人は知らないんです。私たちは、ブラジルでよく教えられていました。日本人の地位もすごく高いです。なのに、日本に来るとあなたは外国人だ。でもブラジルでは、あなたは日本人だねって言われるんです。これは何だろうって思いましたね。「私はブラジルじゃ日本人なのに、なぜ日本に来ると外国人なの？」逆に「私ってブラジル人なの？」って思いました。そういうところもすごく大事ではないのかなと思います。英語に関するのと他の言語に興味を持ってくれることはとても重要だと思います。

3つ目です。最後なんですけれど、二つの文化を持つことを通して、両親と私の日本に対する思いの違いです。私の両親は全く日本語が話せません。弟は今、中学校1年生なんですけど、逆に弟はポルトガル語が話せない。だから私が通訳しながら生活しています。私は日本語も話せますし、ポルトガル語も話せます。ただ両親と弟が接する時、使い分けなければならない状態に陥っています。二つの文化を持つということはとても強みではあるんですが、一方でとても苦しいです。家の中ではブラジル人でなければいけないのに、外に出たら外国人だけど日本語で話さなければならない。大学に行ったら全部日本語だし、授業も全部日本語だし、知り合いも友だちも全部日本語で話します。だけど両親とはポルトガル語で話さなければならないし、弟が両親と一緒に話したい時は、その場において訳さなければならない。なので、その生じてくる違いは価値観だと思います。たまに両親としゃべっていても、全く見ている視点が違うと感じます。私はブラジル人

ではあるんですけど、8年も日本に住んでいるため日本人化しています。その経験から、今、淵野辺にある桜美林大学の学生なんですけど、淵野辺の方で日本語のボランティアをしています。外国人だけれど、日本語教えてるんですよ。この前生徒に「あなたは日本人だ。」って言われました。「あれ？」って思ったんです。私は外国人なのに外国人にあなたは日本人だって初めて言われたんですよ。「何でだろう。」って思いました。でも両親にもその話をしたら、両親からも「あなた日本人だよ。」って言われました。自分では気づかないんですけど、性格も、やっているその謙虚さも全部日本人化しているように思います。なので、日本に来る、違う国に行くってことは、その子どもはその環境に慣れるために自分を変えなければならない。両親はそれを受け入れるしかないんですけど、それは、両親にとっても苦しいことですし、子どもにとっても苦しいことだと思います。ただ、それをどうやって第三者、先生やら知り合いが支えるかが、とても大事な鍵になると思います。子どもたちに2か国語をしゃべれるってことは、自分の強みだって思わせること

です。それを気づかせることが大事だと思います。ありがとうございました。

【テリー】

5分ぐらいしか時間がないんですけども、この時間を使って質問票を書いていただけたらいいかなと思います、我々に。それで今日、せっかく、みなさん、集まっていたいたので、少しでも日本以外のことを感じてもらいたいと思って、お菓子を用意したんです。日本のじゃないお菓子を用意したのでちょっと食べながら書いていただけたらと思います。

【司会】

ではただいまから、10分間のブレイクタイムといたします。テリー先生が、お菓子を用意してくださいました。あちらのテーブルにあります。せっかくですので、お茶も用意いたしました。質問シートをお書きいただいて、そちらの方に足をお運びいただければと思います。スタッフが質問シートを回収させていただきますので、よろしくお願いいたします。

■ブレイクタイム



【テリー】

ベルギーのクッキーと、私のお勧めの韓国のトッポギのお菓子と、それからトルコのイチジクとか、ちょっと、珍しいので食べてみてください。あとアメリカと言えばチョコレートとか。私が集めてきたの。食べてくださいね。



■第二部 質疑応答

【林田】

それでは、残り時間もわずかになって参りました。お茶とお菓子はいかがでしたでしょうか。

テリー先生のご厚意で、ありがとうございました。場が和んだように思います。

たくさんの皆さまから、質問シートをいただきました。ただほとんどは、ケイコさんに対してでした。あと、ご意見なども頂戴しておりますありがとうございます。時間の許す限りお答えしていきたいと思います。

【林田】

それでは、一番多かったのが、ケイコさんに対してのご質問でしたので、いくつかまとめさせていただいて、ケイコさんにお答えいただきたいと思います。ケイコさんが発表した中に、学校が楽しいということが一番大事なことだとありました。「日本の学校が楽しくなるために必要なことは何だと思いますか？」それと、「これまでブラジルから日本に来て一番うれしかったことは？一番辛かったことは？」というようなご質問をいただいております。そのあたりから、ケイコさんに話していただきたいと思います。

【根本】

まず、学校が楽しいと思える環境について。愛川町の例を使うんですけど、例えば、あいさつだけでも、自分は外国人でいいやと思うような、そういう環境は大事だと思います。先生からこの子の国はこういう国ですよっていう紹介があるだけでも、とても楽しいって思えるような環境になると思います。私の場合だと一番つらい経験に入るんですけど、そういう人が一人もいなかったんです。ポルトガル語を話せる人もいなかったですし、外国人もいなかったの、そういう体制は全然なかったです。外国を知ってもらおうとか、そういう授業もなかったですし、そういうイベントもなかったです。なので、イベントとか教室を開く必

要はあるんだなと思います。国際理解教室というのは、英語で話しましょうっていうのが小学校から始まっているんですけど、英語、とても大事だと思うんですけど、それ以外の外国語も大事だと思います。国際理解教室っていう多文化理解教室みたいなものも、やるべきではないかと思います。もうちょっと、海外のこと、アメリカ以外のところに目を向ける必要があるのではないかと思います。

で、学校でうれしかったことですが。とても辛かったです、小学校は。でも一番うれしかったのは、友だちがポルトガル語と日本語の会話の本を買ってくれて、それでしゃべっていました。本を使って話したんです。それが話せるようになるための勉強にもなりましたし、コミュニケーションを取るツールとして使っていたので楽しかったです。こんなに自分に興味持ってくれるんだと思って、とても心の支えになりました。で、辛かったことは、やはり外国人がいなかったということと、学校がどう接するべきか、どう対応するべきかわかっていなかったの、それはとても辛かったです。

【林田】

ありがとうございました。

「土屋先生に質問」というのがあります。「外国につながる生徒たちが、自分の母文化について、友人に

話したり、発表したりする機会は学校の中にありますか？」というご質問です。

【土屋】

以前は、文化祭のステージ発表の際に、例えばモンゴルの子がモンゴルの衣装を着て発表したり、というのはありましたが、最近は大きく発表するようなどころってというのは、なかなかございません。昔に比べると外国人の生徒が多くなっておりまして、ほぼ、各クラスに在籍しているような状態です。鶴見区の場合は他の区と違うところが、幼稚園とか保育園の段階から外国の子と一緒に生活しているのが当たり前。特に違和感はないんですね。ですから新しく、ポンと、どこかの外国から日本語がわからない子が入ってきても特にアレルギー反応は起こしませんし、その授業に通訳の方が入り込みをしたとしても、みんな普通に淡々と受け入れている状態ですので、言い訳になってしまうところもあるかと思うのですが、特に今のところは、何か特別なことをやっているというのはございません。

【林田】

ありがとうございました。これはケイコさんにお答えいただけるといいと思うのですが。今日は国際結婚の方もご出席されておりまして、たぶん二つの文化を持ったお子さんを育てていらっしゃる。そこでの迷いや、苦しいと思うことをお書きいただいております。その中で一つ印象に残った言葉が書かれていますが、「自分のルーツについて、前向きにとらえるために何か良い方法はありますか？」ということです。この件に関していかがでしょうか。

【根本】

先ほども、お話したんですけど、弟は自分がブラジル人であることを全く自覚していないんです。それをどうやって自覚を持たせるのかって、今、すごく考えています。私が日々心がけていることなんですけど、



ブラジルと言ったら、サッカーですよね。それをすごく自慢します。自分の国の自慢を、とにかく聞かせます。「ブラジルはすごいんだよ。」って。「日本もすごいけれど、ブラジルもすごいからね。」って何度も言ってます。自慢話はとりあえず一番重要として、後は、あいさつが日本語とポルトガル語で共通することを教えます。それと、例えば「ボタン」って単語ありますよね。あれ、ポルトガル語なんです。それも言います。「この単語の由来はポルトガル語なんだよ。」とか、そういう雑談もします。とりあえず、「あなたの国はすごいんだよ。」っていうアピールはしてください。それは、とても心の強みになると思います。だって、二つの文化を持つことってすごいことですし、他の人たちとは違うと思うってしまうかも知れないんですけど、日本でも自分の国でも生きる、二つの選択ができるってことはすごく素晴らしいことだと思います。それで、ぜひ、勇気づけてください。

【林田】

ありがとうございます。同じような質問になるかも知れませんが。本来であるならば、母語である、この場合は韓国語と書かれておりますが、それをお子さんに話してほしいと思っても、お子さん自身が話したとしないと。今のケイコさんのお答えの中にもあったように思いますが、弟さんの例もそうですね。二つの言語を同時にきちんと話すというのは、非常に難

しいと思います。ただ親としてはルーツである言語を、できることなら子どもにも習得して欲しいという願いはあります。その思いを持ち続けつつ、今、ケイコさんが言ったように、二つの国のいいところを伝え続けるということも必要なのかもしれない。

これ以外に、ケイコさんへのご質問があります。このMYプラザを使うようになって気持ちが変わった、きっかけになったお話があったと思うのですが、誰かに声かけをしてもらったのか、あるいは声かけしてもらったとして、それに応じようと思うようになった気持ちの変化についてです。私も実は小学校の時から知っているのですが、具体的にいうと中学2年生と3年生、その頃が転換期だったのではないかと思っています。何か声かけがあったのか、あるいは周りの大人たちの支えについて、少し具体的にお話しただけならと思います。

【根本】

先ほども話しましたが、そこの入口に座っている方が私のロールモデルの園田さんです。彼女に小学校6年の時からお世話になっています。両親の通訳だけではなく、私の第二の母として日本でとてもお世話になっています。中学の時に不登校になった時期があったんですね。学校に行っても全く分からない。だったら、何で学校に行かなきゃいけないのっていう気持ちがあったからです。あと両親には、もし高校受験が失敗したときは、ブラジルの高校に行かせるっていう考えがあったので、高校受験になかなかやる気スイッチが入らなかった。もう、落ちればどうせブラジルに帰れるし、私はどっちかっていうとブラジルに住みたいしっていう気持ちがあったので、全く本当に学校に行かず、

週に一回ぐらい行く状況で、本当に学校が嫌い、行きたくないという状態でした。

その時に園田さんを見ていて、園田さんはポルトガル語、日本語だけではなくて、スペイン語も話せていて、英語の先生もやっていて、しかもフランス語も教わっていて、「すごい！」と思って、私、「このぐらいの人間にならなきゃダメだな。」と思って。「私は日本語も話せてないし、ポルトガル語もまだまだだろうな。」って思いました。私はセミリングルで、どうせ今高校に落ちて、ブラジルに帰っても、ブラジルの高校に入る保障なんてないし、だったら日本で頑張らなきゃダメだなんて思いました。で、そのときに園田さんに言われた言葉なんですけれど、「ブラジルに渡った移民の方たちは、ゼロから全部作り上げた。今のブラジルで尊敬されている日本人という地位も、全部ゼロからのスタートだった。」だったら、私にもできるって思いました。日系人であることのプライドであったり、ロールモデルっていう素敵な存在に出会ったのに、ここで捨てたらもったいないなと初めて中学校の時に気づきました。中学校3年では確かに挽回はできなかつたです。勉強にもついていけませんでしたが、成績表で見ても1ばかりだったし。でも高校受験の時に、国際教養学コースの学校を選んで、自分はブラジル人であることを、特に面接でアピールしました。

「私は2か国語話せます。私はブラジルと日本のかけ橋になりたい。」そういうことを前提に、本当にすごくアピールしました。でするので、ここに来て、つづきMYプラザに出会って、自分が最も変わったことは、自分が日系ブラジル人であることに誇りを持つようになったということです。そのロールモデルができたことで「私は大丈夫だ。私は負けないんだ。」っていう気持ちになりました。終わります。

■おわりに



【林田】

ありがとうございました。終了時間が迫ってきておりまして、この辺で、本日のまとめに入りたいと思います。今日は、『外国につながる子どもたちの心の声』というテーマでセミナーを開催させていただきました。「外国につながる」という言葉を私たちはどのように使っているかということ、外国籍、あるいは外国籍取得者、二重国籍などの状況にある場合に使います。こういう子どもたちを外国につながる子ども、あるいは、外国にルーツを持つ子どもと考えるわけですが、今日も何度も出てきた、二つの文化を持つということが前提にあるかと思えます。

普段から接していて感じることは、子どもたちは自分が思うこと、感じたことをそのまま伝えることが非常に苦手であるということ。また伝えようとして、誤解を受けることがあるということ。そんな場面を何度も何度も見してきました。「わからないことは、わからないと言っていいんだよ。欲しいものは欲しいと言っていいし、イヤなものはイヤだと言っていい。その言葉が、日本語で出なかったら、自分が話しやすい言葉を使っていいんだよ。」というメッセージを、出し続けています。それでも、特に、自分の意に反して呼び寄せられた子どもたちの多くは、日本語に直ぐに馴染むことができず、彼らは言語の壁と人間関係を構築することの難しさという壁にはね返されてしまいます。そして、自分が思うことを素直に言える場面になかなか出会えない。そのきっかけを得ることさえもできないという状況に置かれます。

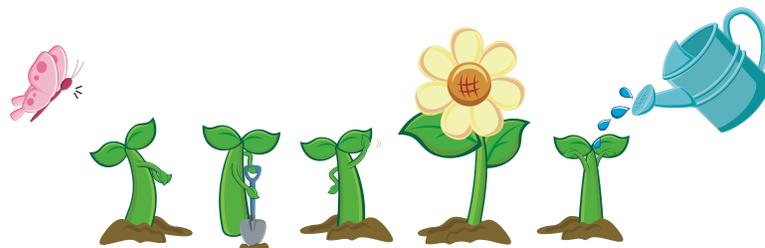
そういう子どもたちをたくさん見てきて思うのですが、一番大切なのは、中心にいるのは、本当は子どもであるということを再認識すること。今日のテリー先生のパワーポイントの中にも、円の中心に子どもがいました。それを取り囲む大人たちが、どうやって彼らの状況に理解を示すのか。どうやって支えるのか。大人の存在の大切さということも痛感しています。まずは周りにいる大人たちが、こういう子どもたちがいるんだということを知ることから始めなければなりません。

今日のケイコさんの発表にもありましたが、日本語が話せるから勉強ができるわけじゃない。これがよく言う、生活言語と学習言語の違いですね。これを知ること。多くの場合、生活言語を先に習得しますので、会話はできるようになります。でも国語はわからない。数学、算数、社会、理科、どの教科においても、テストの時の設問の意味が分からない。日常会話はできて、設問の意味が分からないから答えを導き出せない。ということは、いい点を取ることができない。低学力になる。つまり、悪循環に陥っていく。その原因になります。まずは、周りにいる大人たちが、生活言語と学習言語は違うんだということを知ることがあります。生活言語は比較的早い時期に習得することができますが、学習言語の習得には、本当に長い年月がかかります。おそらく、今、大学生になったケイコさんにしても、十分な日本語力がついているかと言えば、どうでしょう、まだまだ勉強の必要がありますね。例えば、これからレポートを書くとか、論文を書くとなった時には大きな壁となって立ち上がるはず。新聞は難しいと言っていましたが、繰り返し、繰り返し勉強して、そして大人の支えもなければ、子どもたちは理解できない。そう感じています。

テリー先生には、当事者も支援者も勇気づけられるようなお話を、明るく楽しくご講義いただきました。また、日頃から国際教室のご担当としてお忙しくされている土屋先生にもお越しいただき、さまざまな事例をあげていただきました。そして、何より、当事者である根本ケイコさんにお話していただいたことは、深く考えるきっかけになりました。この質問シートの中には、「ケイコさんのお心の声が聞こえてきました。」と書いてくださった、嬉しい言葉もありました。たくさんいただいた質問シートのすべてにお答えすることはできませんでしたが、私たち大人は、外国にルーツを持つ子どもたちへの理解を深め、どうやって自分の立場で支えることができるのかということを考え続けなければいけないと思います。

ここで館長をしておりまして、多くの外国につながる子どもたちや家族の支援をしています。子どもを支えるためには、家族を支える必要があります。子どもと家族は切り離すことができません。また小学校を卒業したからといって終わりではなく、中学校を卒業したからといって終わりでもなく、ここに住んでいる以上、私たちはエンドレスの支援を続けます。おそらく子どもたちに関わっておられる皆さまも、同じではないかと思います。機会がございましたら、また一緒に、このテーマについて考えたいと思います。本日は長時間にわたり、ありがとうございました。これで終了いたします。





発行 つづきMYプラザ(都筑多文化・青少年交流プラザ)
〒224-0003
横浜市都筑区中川中央 1-25-1 ノースポート・モール 5F
TEL : 045-914-7171 FAX : 045-914-7172
URL : <http://tsuzuki-myplaza.net/>
発行日 平成 27 年 10 月
編集 都筑多文化・青少年交流プラザ(つづきMYプラザ)



つづきMYプラザ
TSUZUKI MULTICULTURAL & YOUTH PLAZA